

ホ

ペイロとの出会いは、私が20歳の時でした。Jリーグが誕生する前年の92年、『外国のホペイロ』という特集をテレビで観て、「これだー」と思ったのがキッカケでした。

その番組に出ていたのが、当時読売クラブ（現V川崎）でホペイロをしていたベゼーハさん。私が試合を観に行つたとき、知り合いのブラジル人がラモス瑠偉さんとベゼーハさんとまたま顔見知りだったんです。そこで話をしてもらって、「一緒にやってみないか」と言ってくれて……。93年の10月からV川崎の一員になれたんです。

エアガン（空気圧で汚れを吹き飛ばす機械）を取り入れたりと、ずっとベゼーハさんと意見を出し合いながらやってきましたが、98年にベゼーハさんがブラジルに帰つてからは自分だけ。それからはプレッシャーを感じながらも、誇りを持ってやっています。

仕事内容は、大まかに言うと、試合用と練習用の2つのユニホーム&スパイクの修理と管理。ホペイロの試合は準備のときから始まっている。土曜日に試合があるとしたら、火曜日から試合用のスパイクを磨いて、水曜日と木曜日で試合用のユニホームやアップ用のシャツやシューズなどを用意します。そして金曜日、メンバー発表後に持つていくものを最終確認するんです。

忘れ物をしたらクビと同じですから、とにかく「確認」が大切。「確認」を重ねることで「安心」に変わっていくんです。もちろん、いままで一度も忘れ物をしたことはありません。

以前、ラモスさんやカズさん（三浦知良）に言われたことがあるんです。

「Jリーグができて選手がプロになったんだから、お前らスタッフもプロなんだぞ」と。いまでも忘れられません。

ですから、自分もプロ意識を持つて仕事をしていますから、何よりチームが勝つたときが一番嬉しいですね。スパイク磨きのときから「ゴールを決めてくれ」とか「ケガをしないように」という気持ちを持って磨いています。

今年で8年目になりますが、いままづく感じるのは、ホペイロという仕事はただの用具係ではないんだなという事です。選手たちがコーチや監督に言えない悩みなどを相談されたりとか。チームが家族だとしたら、父親は監督、子どもは選手、そして私を含めてスタッフは母親といった感じ。クッション役として、少しでもチームの役に立っていると思うと、さらに仕事に誇りを持つてるようになっていきました。



「Jが誕生してスタッフもプロ化だー」。ラモスさんやカズさんに言われて、仕事に誇りを持った

まつ うらのり よし 松浦紀典

（ヴェルディ川崎／ホペイロ）

ただの用具係ではない
母親のような存在です